

# 歴史は語る

2015年1月15日発行 第10号 編集責任者 青田 勇

## 特集「女性宣教師」

### マーサ・B・エカード

#### 米国ルーテル教会最初の独身女性宣教師

青山静子（金城学院大学社会学非常勤講師）

マーサ・B・エカードは、1887年4月17日米国テネシー州サリバン郡ミルポイントの近くで、9人兄妹の次女として誕生。6歳でミルポイント・インスティテュートに入学。子供時代は、仲のいい両親、信仰心と愛に満ちた家

庭、姉妹や近所の友人たちと自然の中で跳ね回りながら幸せな日々を送った。1886年大西洋岸南部の教会は南部一致ルーテル教会(USC)として活動を開始、翌年日本伝道



写真中央がマーサ・エカード（左）マリオン・ポッツ（右）マーサ・ハーダー

を決定、92年シェーラー牧師と

ピリー牧師、98年ブラウン牧師夫妻、1900年リップパード牧師夫妻を派遣。宣教師の妻たちは子育ての合間に、「洋裁講習」、「料理講習」、「英語クラス」、「音楽クラス」などを開いて伝道を行う。しかし、活動は思うようにはかどらず、伝道局に女性宣教師の派遣を働きかけた。宣教師の妻たちの呼びかけに応じて、USSの女性たちは日本への女性宣教師派遣を検討する。一方、教会では主婦が育児や

家事だけに没頭しているのではなく、積極的に伝道や社会活動に従事しようという機運が高まっていた。このことが日本への女性宣教師派遣の要請と相まって、女性宣教師の結束を高め、女性宣教師派遣の資金づくりの運動が始まった。中心的な役割を果たしていたのがクロンク夫人であった。

1900年エカードは大きな悲しみに包まれる。4月に母がガンで死去、翌年一月に父が肺炎で永眠。このため、彼女は学校には通わず、家庭教師による教育を受けている。

エカードは1901年9月14歳でサリバン郡プリストルにある南部メソジスト監督教会のサリンズ・カレッジの「予科」、翌年「本科」に入学。彼女は宣教師への興味を奥深く秘めていた。後年、『タイディングス』というルーテル教会の月刊誌に掲載されていた日本での伝道記事を読み、日本伝道に必要性を見いだす。エカードは自分の思いを誰にも告げずにいた。それは、「あまりにも大きすぎて自分のようなごく普通の少女の人生に実現されることはないと思われた」からであった。

ヴァージニア州南西部スミス郡のマリオン・カレッジに入学。同校は、1873年南西ヴァージニア福音ルーテルシノッドにより設立された3年制の女子カレッジで、J・J・シェーラー牧師が創立の年から1910年まで学長を務めた。シェーラー家は理想的なクリスチャン家庭で、大学構内に住まい、学生たち特に寄宿生と親しく付き合い、キャンパスには家族的な雰囲気があふれていた。夫妻には4人子供がいた。三女キャサリンがクロンク牧師と結婚したクロンク夫人である。1906年にはUSS婦人伝道局が発足、宣教師たちが日本で暮らす家の購入資金や女性宣教師派遣の募金運動を始めていく。

エカードは16歳から18歳まで、英語、歴史・公民、数学、自然科学、ラテン語、ギリシャ語、ドイツ語、フランス語を学び、1905年6月に卒業。同年9月から1年間付属高校で教師を務めた。「マリオン・カレッジでは伝道活動が盛んであったので、宣教師になる思いが強められた」と述べている。

1909年9月22歳のエカードはワシントン市にある幼稚園師範学校に入学。動機は、日本伝道の準備のためであったろう。1902

年ルーテル教会は佐賀幼稚園、7年後小城幼稚園を設立、その後も幼稚園を設立する計画を検討していたと思われる。日本伝道を行うには幼稚園師範の資格が必要と賢明なエカードは考えたのだ。

エカードは、1911年6月幼稚園師範学校を卒業後、宣教師として日本に行く旨をUSS婦人伝道局に伝えた。だが、「独身女性宣教師はまだ日本に派遣されない」との返事であった。彼女は自分の将来を考え直す必要があった。その頃、「ディアコネス」という職業が南部の若い女性たちの関心を引いていた。エカードはディアコネスとして米国内の教会で奉仕する決心を固め、その年9月メリーランド州のマザーハウス訓練学校の聖書研究科(2年制)に入学。

一方、USSの婦人伝道局では活動も活発となり、組織も拡大してきて、1912年までには、2人の女性宣教師の日本派遣の財政的なめどがたつてきた。

エカードは、1913年6月訓練学校を卒業、勤務地も決まっていた。やがて、婦人伝道局より「宣教師として日本派遣」の知らせが届いた。その知らせは、エカードにとって大きな喜びであったと思われるが、同時に、ディアコネ

スとしての心の準備も整い、第一歩を歩みだす時でもあり、エカードの心は大きく揺れた。かなりの迷いの時間があったが、最終的に宣教師の道を選んだ。

エカードは、訓練学校で共に学

んだ牧師の娘メリー・バウスと共に同年12月ジョージア州サヴァナの昇天教会で、日本伝道の召命を受け、1914年1月USS婦人伝道局から最初の独身女性宣教師として横浜に到着した。

## 主の僕、モード・パウラス

慈愛園職員 小石川教会員 山内恵美

福山猛師編纂の『日本福音ルーテル教会史』(いわゆる六十年史)の中で「わがルーテル教会に於て始めて組織的な社会事業を開始し、多くの功績をのこし、今なおこの事業に専念しているのはパウラス姉妹である」と紹介されている

モード・パウラス、エーネ・パウラス姉妹は、数多くの女性宣教師の中でも特筆に値する働きを残した。

姉モードは、熊本の総合福祉施設慈愛園の創立者として、その働きはさまざま形で取り上げられ

ている。また自らの著書「Gathering Up the Fragments」が稲富いよの姉翻訳により慈愛園創立六十周年記念・「愛と福祉のはさまに」として、さらにモードの後継者潮谷総一郎氏により『モード・パウラスの物語 くるみの実のなるころ』として子どもにもわかりやすい文章で、今でも私たちの手元で読むことができる恵みは大きい。

モードの社会福祉分野における数々の業績については、他の資料に詳しくまとめられているのでこちらに譲ることとし、ここでは婦人宣教師としてモードを日本に送り出した家族背景について、あらためて紹介する。また、モードがどのような思いで目の前の人々に関わってきたのか、その思いの一端を上掲の資料から拾いながら、モードの上を示された神の業を振り返ってみよう。

第一世代ヨハン・パウラス、1721年ドイツ生まれ。47歳の時(1768年)ドイツからアメリカ大陸に渡り、ノースカロライナに移住。第五世代となる父ジョンが、43歳の若さで腸チフスで亡くなったとき、モードはまた10歳。母マーガレットには、2歳から18歳までの八人の娘と一人の息子が残され、その息子もわずか14歳で腸チ

フスで亡くなった。

教員経験のある母マギーは、広大な土地で牧畜農業を営みながら母子家庭として決して裕福とは言えない生活の中から、娘全員に高等教育を受けさせている。この生活は、モードが慈愛園で行った実践のモデルとなっている。姉妹の祖父エリは土地、材木、労働力などをパウラス家族が通っていたレバノンルーテル教会および地域の学校建設のために寄付、また八姉妹の中から二人が宣教師に、三人がルーテル教会の牧師夫人になっていることから、非常に信仰深いパウラス家族の姿が浮かび上がる。

母マギーは、朝は4時から夜遅くまで働く忙しい日常にあっても、日曜日には一家が仕事を全部休み、朝の礼拝に出席し午後は神様について静かに考え祈る生活を怠らなかつた。また、子どもたちには、アメリカから大勢の牧師たちが宣教師として世界の国々で伝道をしていることを話し、そのため祈ることを教えた。

モードは、わずか11歳で日本への伝道を志した。それは、先に日本の佐賀で幼稚園の働きを通して伝道・教育活動をしていた宣教師リップパード夫人の報告を読み、彼



女の呼びかけを神の声として聞き取ったのであった。柔らかに純粹な幼い心にまかれた種が、後に多くの実を結んだ。ここにも、一人の女性宣教師の働きが、次なる神の働き人へとつながっている神の業をみる事ができる。

その後18年経ってようやく日本を踏んだモードを待っていたのは、「社会福祉事業をすることは、わたしが選んだことでは

なかった」と述懐しているように、思い描いていた働きではなかった。しかし、ある意味でモードにとつて自分のやりたかった仕事でも専門的に勉強した仕事でもなかったがゆえに、自分の思いに頼らずすべてを神様に祈り御心に聞きながら、神様が示される道を歩み続けることができたのではないだろうか。

モードにとつて40年間の慈愛

園の生活は「貧しい人たちはいつもあなたと一緒にいる」(マタイ26章

11)のキリストの言葉の真実を示し続けるものになった。モードが仕事を

をするにあたって最も有難いと思つた自らの賜物は、

悩みの中にある人々を理解し、同情する能力であつた。「貧しいものと

共に苦しみ、不運な人、性格に欠陥のある人、あるいは

はきびしく残酷なこの世と戦う能力に欠けている人々

とともに真実に苦しむことは、愛の偉大な技術である。願ひ事があつて私のところへ来る人々すべてに、キリストのようなあわれみを持つようになることが、私の理想であつた。」

そして、「わたしの任務は『散らされたものを集め、何者も失われないようにする』ことであつた」と言うモードは、その言葉通り、何者も選り好みせず、ただ目の前の困っている人々をキリストのもとへと集めるように、手を差し伸べていったのである。

モードは、慈愛園がこれからもキリストを中心とする施設として機能し続けることを確信して慈愛園を去つた。そして、29歳で来日し70歳で引退するまでの41年間の働きに対して「自分が成し遂げてきたことをではなく、私の主イエスが、世の終わりまで私と共にいるとの約束を守つてくださったことを誇りたい」と述べている。多くの業績を残し、人々からも称賛され、また数々の表彰も受けたモードであつたが、人間による評価といふはかないものを喜ぶのではなく、ただ、この働きの初めから終わりまでいつもキリストが共にいてくださった恵みを喜び感謝する、主の僕であつた。

## 女性宣教師を支えた「女性海外宣教会議・協会」

青田 勇

19世紀から20世紀前半はプロテスタントの海外宣教が最も盛んになった時期である。アメリカにおいても、1900年以前にプロテスタントの海外宣教会団は全部で81を数えた。さらに、その後の40年間で、147の海外宣教会団が新たに誕生したと言われている。これらの海外宣教会団を支援したのは教会の女性たちである。彼女たちは何千マイルも離れた海外伝道地のために祈り、そのための特別な伝道プロジェクトの具体的支援を行った。

にあつた女性海外宣教会の共同の業として設立された。なお、付け加えれば、この創設論議の時、日本のルーテル教会としての最初のミッション・スクールとなった「九州学院」の設立のための資金援助も併せて決議されている。

41団体に上つたと言われている各プロテスタントの女性海外宣教会議・協会は敬虔な信仰だけでなく、知的にも洗練され、情熱的な意欲を持った1200名の独身女性宣教師がアメリカから世界各地の伝道地に派遣され、彼女たちにより、多角的な宣教支援が行われた。

各シノッドにあつた女性海外宣教会の主たる目的は経済的支援よりも、南部アメリカ女性の中から有能な女性をボードを通して日本伝道のために派遣することにあつた。だが、女性宣教師の活動が安定して維持されるためには、それなりの資金が用意されなければならないので、伝道資金の確保のための周到な準備と積極的支援にも女性海外宣教会は努力を払つていた。

南部一致シノッドの女性海外宣教会議は1906年7月にノースキャロライナ州ダラスで、南西バージニア、ノースキャロライナ、サウスキャロライナの各シノッド

南部一致シノッドが日本伝道のために派遣した最初の女性宣教師はM・B・エカードとM・L・パワスである。この二人は1913年11月にジョージア州サバナの昇天ルーテル教会(Ascension Lutheran Church)での派遣式を経て、日本伝



草創期の慈愛園の子どもたちと M. パウラス

道のために九州・福岡地区に任命された。この二人の派遣のために女性海外宣教会議からボードに拠出した資金は当初、2100ドルであり、具体的には彼女たちの給与と伝道活動のために用いられた。

これらのための必要な伝道資金は各シノッドの女性海外宣教会議につながる各教会の女性会による献金と奉仕活動によって支えられており、それらが女性宣教師だけでなく、必要においては男性宣教師の給与サポートのためにも、また女性宣教師が主導的に起こした幼稚園・社会福祉事業などの年間支援のために、さらにはミッション・スクール設立と維持のために用いられていた。

女性宣教師の給与について推測を交えて言えば、日本に派遣された最初の女性宣教師は6000ドルを下らない額を年間給与として受けていたと思われる。独身の男性宣教師の給与が8000ドルであるからして、女性宣教師の給与は約25%安く見積もられていたとしても、未知の世界への能動的な伝道活動という点からして、女性宣教師の職業は自立と自活をする当時の教会の女性にとっ

て主動的な情熱を傾けることのできる魅力的な仕事のひとつであったのではないかとと言える。

各個教会の女性会の献金は各シノッドの女性海外宣教会議に一旦取められ、その資金の大半はボードに送金された。そのほかに各教会の女性会から直接、女性宣教師に送金し、それらは女性宣教師が担当幼稚園・社会福祉の諸事業に用いられていたのではなかつたかと、十分に推測できる。ただし、それらの直接的資金・献金の使途はボードの一定の事前の理解と了解のもとに行われていたと思われる。

また、女性海外宣教会議の設立に際して、シノッドの了解とボードの意見が尊重されていたし、女性海外宣教会議につながる支援組織となった女性会の働きを個々の教会において結成する際も、各個教会と牧師の理解の下で進められおり、その意味でもルーテル教会としての海外宣教の一体性と共同性が底辺に確かなこととしてあったことを忘れてはならない。

女性海外宣教会の働きとその事業を理解するために、ここに一人の女性を紹介したい。それは

バージニア・シノッドのE.C.クロンク牧師夫人であるキャサリン・クロンクである。彼女はバージニア・シノッドの女性海外宣教会会長を1921年から1922年まで務めた。さらに同後の北米一致ルーテル教会での子供会会長及び子供の月刊誌編集長なども歴任し、世界の子供たちへの支援にも精力的な日々を送っていたが、彼女は1927年3月12日、49才の若さで天に召された。

彼女の死後、その能動的な働きを覚え、アメリカの教会の子供たちからの多額の献金が慈愛園に送られてきたことにより、その資金に基づき、女性宣教師エーネ・パウラスは1929年10月、慈愛園正門近くに、彼女の名前を取って、日本で最初となった「クロンク・ナースリースクール」と二、三歳を対象とした「クロンク幼稚園」(現・神水幼稚園)を設立した。



キャサリン・クロンク

## ULCA 北米一致ルーテル教会

### エマ・リップード



C.K.Lippard  
Lippard, Emma  
1981.8.12-1963.3.7

南部一致シノッドの宣教師C.K.リップードの妻。エマ・リップードはシカゴ神学校の教授ガーバデングの娘で、夫リップードの神学校卒業と同時に結婚して、来日し、佐賀教会に着任した。

特別な幼児教育を修めてはいないが、結婚前から内面的な使命感を強く持ち、日本伝道派遣後は公的な宣教師として、伝道活動においても意欲を燃やした宣教師夫人の一人であった。佐賀に着任して2年後の1902年10月、25名の園児を対象に宣教師館でルーテル

教会としての最初の幼稚園を開園し、園長となった。主任保母は山内量平の妻幹枝であった。保育日は、毎週月、木、土の3日間で朝9時から11時であった。1906年8月に軽井沢での最初のキリスト教主義幼稚園の全国組織となった「日本幼稚園連盟」が結成された時、その設立者の一人として名を連ねた。

1906年10月、出産後の経過が思わしくなく、医師の勧めに従って、アメリカに一時帰国したが、回復後、1908年4月、佐賀に着任した。1921年3月、熊本に着任したが、夫のリップードが健康を害したので、その年の夏に、神戸に転任した。1926年に一時帰米し、1932年に再来日し、夫と共に門司に赴任した。1941年、帰国し、夫が定年を迎えたので退職した。



1902年 佐賀幼稚園 最後列中央 リップード夫人

## メアリー・バワス



Bowers, Mary Lou  
1885.9.27. - 1949.10.1

メアリー・バワスは南部一致シノッドから派遣された最初の女性宣教師。サウスキャロライナ州コロンビアで生れる。父A・J・バワスはエベネゼル・ルーテル教会の牧師。ニューベリー大学を卒業後、数年間、公立学校の教師及び婦人宣教師養成所で研鑽し、1913年11月に来日。1915年9月下旬より、共に来日したM・B・エカードと共に佐賀市中橋小路に同居し、佐賀教会の日曜学校、バイブルクラスなどの直接伝道に従事した。

1916年に、エカードと共に博多に転任し、婦人のための料理教室を開き、地域伝道に取り組んだ。1917年初夏の時期に予期せぬ病気に罹り、ソウルの外国人病院での治療を経て、一年間、アメリカに帰国する。

1919年10月、再来日し、博多教会に帰任する。1922年

10月、九州学院の英語教師となっていたL・G・グレーと結婚し、1926年に帰米。

## ヘレン・シャーク



Shirk, Helen M.  
1897.4.1. - 1986.10.20

ヘレン・シャークは北米一致ルーテル教会から派遣された女性宣教師。米国ペンシルバニア州に生まれる。1914年、レバノン高等学校を卒業後、ニューヨーク大学でキリスト教を専攻し、さらにコロンビア大学で教育、心理学の学位を得る。ペンシルバニア州レバノン聖ヤコブ教会での派遣を経て、アメリカ一致ルーテル教会の宣教師として1922

年に来日。博多教会の南博幼稚園園長(1925年就任)、及び久留米教会の日善幼稚園園長(1926年就任)の幼児教育と地区の伝道に従事し、1931年には箱崎幼稚園(現・恵泉幼稚園)を設立した。日米関係の悪

化に伴い、1940年秋頃からアメリカ国務省や諸派のミッション団体は宣教師の離日を促すようになり、休暇でアメリカに帰国したシャークは、日本に戻らず、ニューヨークの教会で幼児教育の推進と日系二世人の定住を助けるために働いた。1947年より、北米一致ルーテル教会の海外伝道局の幹事となり、宣教師の再来日に尽力した。1955年6月に再来日し、関西地区での伝道に携わり、1965年に定年で帰国。1986年10月20日、ペンシルバニア州レバノンにて死去。



1910年 博多幼稚園 中央 山内量平

## マリオン・ポッツ



Potts, Marion E.  
1893.1.21 - 1974.4.2.22

マリオン・ポッツは北米一致ルーテル教会の女性宣教師。ペンシルバニア州フィラデルフィアに生まれる。コーネル大学、ペンシルバニア大学、ニューヨーク聖書神学校に学び、1921年9月、日本伝道の任命を受け、同年10月、来日した。東京での語学研修の後、福岡に赴任し、英語を通しての伝道に従事した。



九州女学院 エカード(左)とポッツ(右)

1925年、一時、帰国し、心理学を学び、1926年、再来日し、熊本の九州女学院の開校とともに英語教師となり、初代院長M・B・エカードを助け、聖書を通しての生徒の信仰指導にも当たった。日米開戦の直前に交換船でエカード、モード・パウラス、エーネ・パウラスと共に帰国した。

戦時中は、3年間、カルフォルニアの日系人収容所の副校長を務めた。戦後、1948年12月、九州女学院に再来日し、1955年、定年で帰国するまで、英語と聖書を教えつつ、学院の理事職も兼務した。ペンシルバニア州ウィグロープで死去

## マーサ・ハーダー



Harder, Martha  
1894.11.21 - 1993.3.4  
左 夫のL・S・G・ミラー

マーサ・ハーダーは北米一致ルーテル教会の女性宣教師。1894年11月21日、サウス・ダ

コタ州に生まれる。ヘレン・ハーダーの姉。

音楽の才能に恵まれ、10歳で教会のオルガニストを務め、教会の合唱隊を指揮した。同州へイスの教育大学を卒業後、4年間、公立音楽学校の教師を勤めた。ネブラスカ大学卒業後、イリノイ州ロックフォードで開催された女性海外宣教会議の支援を得て、日本伝道の任命を受け、1926年10月、来日した。

2年間、東京で語学研修を受け、1928年から7年間も九州女学院の音楽教師を務めた。1935年5月、九州学院の在日宣教師L・S・G・ミラーと結婚した。

日米開戦前に、休暇で帰国していたが、ボードの方針に従い、日本に帰還せず、アメリカに留まった。戦後は、再来日の宣教師第一陣として、夫と共に、1946年10月16日、再来日し、九州学院及び熊



1925年献堂 九州学院ブラウン・チャペル

本地区の教会の復興再建に尽くした。1951年7月、夫の定年に伴って、帰国した。

### ヘレン・ハーダー



Harder, Helen  
1897.10.12—1993.2.23.

ヘレン・ハーダーは北米一致ルーテル教会の女性宣教師。米国ミズリー州に生まれる。マーサ・ハーダーの妹。ネブラスカ大学、ウエスタン神学校での学びを経て、1927年9月8日、来日。

二カ年の日本語研修の後、東京教会、東京ベタニアホーム、小城教会及び佐賀教会での幼稚園事業に携わり、大戦勃発前の39年に帰米した。終戦後、1948年に再来日、福岡に居住。同年9月より箱崎教会幼稚園の園長に就任し、1949年11月、福



現在の奈多愛育園

岡県より設置認可を受けた幼稚園を恵泉幼稚園に改称させた。さらに、同年より、

福岡市郊外の奈多での開拓伝道に取り組み、1951年4月菅林署より敷地1800坪を借用し、聖ペテロ教会奈多愛育園（園児定員30名）を同年7月に設立した。1965年3月、定年退職で米国に帰国。メリーランド州ルーテル・ホームにて死去。

### エーネ・パウラス



Powlas, Annie Pauline  
1891.2.25—1978.9.10.

エーネ・パウラスは北米一致ルーテル教会の女性宣教師。ノースカロライナ州バーバーの農家に生まれる。モード・パウラスは2歳上の姉。

コロンビア大学で児童教育を専攻。聖書学院及びユニオン神学校での聖書の学びを経て、1919年10月4日、来日。8年間、佐賀及び小城での幼稚園での幼児の働きに従事し、1926年11月に慈愛園に転任し、モード・パウラスを助け、19

29年9月、バージニア・シノツドの女性海外宣教会からの支援を得て、慈愛園正門近くに「クロンク・ナースリースクール」と「クロンク幼稚園」を開園した。1930年、東京に転任し、本所の母子ホームの働きを担うとともに、栄養失調になった子供たちを市川市国府台で育てるために虚弱児童養護所を1931年に設けた。

1941年、日米開戦前にモード・パウラスと共に交換船で帰国した。終戦後、1947年1月、再来日し、市川市国府台での社会福祉事業の再建と本所にある東京ベタニア・ホームの初代理事長を務めた。1961年9月、定年で帰米した。ノースカロライナ州で死去。



現在の千葉ベタニアホーム国府台保育園

東京・小石川での語学研修の傍ら初代宣教師O・ハンセン、ポイヤムと共に東海地区の主要都市を訪ね、伝道視察の旅を繰り返し、静岡、浜松、名古屋の伝道拠点を確定して行った。

## ELC 福音ルーテル教会

### リディア・ハンソン



Lydia, Hanson

リディア・ハンソンは1913年10月21日、カナダのアルベータに生まれる。バニス・ポイヤム (Miss Bernice Boyum) と共に米国福音ルーテル教会 (ELC) より、女性宣教師として派遣され、1950年1月4日にミネアポリスを発ち、陸路を経て1月14日、ワシントン州シアトルの港で「MS China Mail」号に乗り込み、太平洋の巨濤を渡って、2月1日に横浜港に到着した。

1951年より、5年間、静岡教会の開拓伝道に従事する。戦前、1937年から1948年まで宣教師としてELCの中国伝道に身を投じていたハンソンは、その時、12年前に中国戦線に従軍していた鈴木宏に再会し、彼は静岡教会の洗礼第一号（1951年12月受洗）となった。1955年6月、結婚のため母国のカナダに帰国した。

## LEAF フィンランド 福音ルーテル協会



着。ウェロース牧師一家は愛娘の死という不幸が続いたために帰国した。1901年11月に佐賀に赴き、南部一致シノッドのピーリー及びリップパードによる伝道の働きに合流する。しかし、日露戦争の開始に伴い、1905年5月5日に来日したウーシタロ女性宣教師と共に佐賀を離れ、東京へと出立し、しばらくの滞在を経て、7月、下諏訪に居住を移す。ウーシタロと共に下諏訪を中心とする長野での宣教に精力的に取り組んだが、1906年8月4日に休暇をとり、フィンランドに帰国し、その後、二度と日本に戻らず、ヴェシラハティで歿した。

フィンランド福音ルーテル協会（LEAF）から派遣された最初の女性宣教師。ヘルシンキに生まれる。17才の時、ウェロース牧師（A.R.Wellroos）一家と共に1900年12月23日に長崎に到



ウェロース牧師一家とクルヴィネン(右端)

## シリ・ウーシタロ



フィンランド福音ルーテル協会の女性宣教師。フィンランドのラムミに生まれる。1900年、ユニバスクラ教育大学を卒業し、1903年11月、日本伝道に派遣され、長崎上陸を経て佐賀に居住し、女性宣教師クルヴィネンと共に南部一致シノッドの伝道に協力した。

日露戦争の開始に伴い、フィンランドがロシアの属国であり、自らのパスポートがロシアのパスポートであったことから、日本に友好的な姿勢を固めつつあるアメリカの宣教師に不必要な誤解と偏見を与えるという配慮もあつて、1905年5月5日にクルヴィネンと共に佐賀を離れ、東京へと出立し、しばらくの滞りを経て、7月に下諏訪に居住を移した。

1907年に東京に移り、千駄ヶ谷、巣鴨での開拓伝道、池袋での神学塾の開設に携わった。1939年、東京から旭川に転任。第二次

大戦の勃発により、一時本国との通信連絡も壮絶したが、1941年3月、帰国した。ヘルシンキにて死去。

## バップ・カタヤ



フィンランド福音ルーテル協会（LEAF）の女性宣教師。フィンランドのイルマヨキで生まれる。ヘルシンキ大学の神学部在籍中、LEAF派学生連盟の海外ミッション・クラブの責任者を務める。ヘルシンキ大学で神学修士を取得後、イルマヨキ教会にて宣教師派遣式を受け、1959年1月5日、来日。日本に宣教師として来た動機を次のように語っている。「家族の親戚で、中国やアフリカのナミビアなどの宣教師の人がフィンランドに休暇で帰ってきた時に、私の家庭を訪ねて来られ、海外伝道についての話を小さい頃から直接的に聞く機会がありました。そのような話が私の幼

い心に大きな影響を与えました。宣教師になることを決心したのはヘルシンキ大学の神学部の学生の時です。その時、一つの内面の確信を持ちました。『キリストがすべての人のために死んだということではなく、キリストを信じることはできない。』『さうする』(1994年8月号)。

来日後、一年間の日本語研修を経て、1960年から1962年、東京の「キリスト教視聴覚センター（アバコ）」に出向し、世界のキリスト教視聴覚教材収集作業に携わった。1962年から二年間、アメリカのゲティスバーク神学校に留学し、教員学を学ぶ。1963年から8年間、静岡の東海ルーテル聖書学院で教会教育の教師を務める。1971年から1973年、焼津教会の宣教師。その後、1973年から1979年、東京の「聖文舎」の役員となる。1974年、発刊された「教会讃美歌」のフィンランド讃美歌の翻訳に携わる。1979年から1985年、市ヶ谷教会の宣教師。この間、1980年に遠藤周作の『沈黙』をフィンランド語に翻訳し、出版する。1985年から1994年、東京池袋教会の宣教師を歴任。1994年、定年で退職し、帰国。ラプアにて死去。

女性宣教師来日年表					
年	USS・UELC・ULCA・LCA・ELCA	ELC・TALC	AUGUSTANA	SUOMI	LEAF
1900(明33)					E.クルヴィネン
1903(明36)	E.ジョンソン				S. K. ウーシタロ
1907(明40)					J. S. アイロ A. C. ウェステン
1911(明44)					R. ヒットネン
1914(大3)	M.B.エカード M.L.パウス				
1918(大7)	M.パウラス				
1919(大8)	A.パウラス R.ヘンドリックセン M.ボッツ				
1922(大11)	H.M.シャーク				
1925(大14)	F.リップバード A.トーレン				
1926(大15)	G.ビーターズ M.ハーダー				T. ニエミ
1927(昭2)	H.ハーダー M.ヘルチブライドル				
1928(昭3)	M.ウインテル				
1936(昭11)	V. アデルホルト				
1937(昭12)	S.バークナー				M. ミエロ
1939(昭14)	E.デンツァー				
1946(昭21)	M.エカード				
	M. パウラス A.パウラス				
1947(昭22)	M.ウインテル H.ハーダ				
1948(昭23)	V.アデルホルト M.ボッツ				S. リイボネン
	M.ヘルティブライト M. ウッド				
1949(昭24)	B.フロンプル E. アキンズ				S. ボルソ E.アキンズ
1950(昭25)		B. ボイヤム L. ハンソン	A. アーリング	S.マコネン	
		A.M.ミッチェル L. ビーダーセン	L. コルバーク		
		D. オフステデール			
1951(昭26)	E.バーンハート E.ハドル	M. ハンソン C. モスピー			
	D.アークスト E.ムーディー	<b>A. グリック F. マイヤワールド</b>			
	D.オウクスト M.ミラー				
1952(昭27)	E.ドルボロー	A. アルネソン M. ブリングル	M. ホーキンソン		M. ライティネン K. ビーライネン
		R. ハーブスト F.マイホルド	M. L. リンドクイスト		R. レマール
		R. ホルテ			
1953(昭28)		J. ワンゲ		I.R.アホ	
1954(昭29)		G. ネルソン B. サルター			
		E. タフ			
1955(昭30)	H.シャーク	W. アンダーソン D. ボナリー			R. アオ
		L.ロバートダール W. ストランドリー			
1956(昭31)	G. バウアー				
1957(昭32)		A. ストーリー			
1958(昭33)		M. トウエイ			L. サロ
1959(昭34)					W. カタヤ
1960(昭35)		V.ゲルト			
1961(昭36)	N.ハウゼット	M.バウルセン			
1962(昭37)	E. A. シュルツ	E.エレフソン			A. ヒルダ
1963(昭38)	E. ハイトカンブ				
1964(昭39)	L. アッシュバグ				
1965(昭40)					M. ティーラ
1966(昭41)	L. メーレンバーク L.オバーベック				
1968(昭43)	M. ワータースタート				
1969(昭44)	J. デーノルド				H. ビーライネン
1970(昭45)	C.ハンセン				
1975(昭50)	D. ハッカー C.フェデル				
1976(昭51)					A. サロ
1977(昭52)	H.キャストル	D.フランシス			
1978(昭53)	J.アルピング L.ファーレン	R.バンケン			
1979(昭54)	R.スナイダー	K. ボゲル			
1980(昭55)	N.パウクル M.L.バウムガートナー				
	V.ペイヤー M.キャンドラー				
	MM.オルソン				
1981(昭56)		K.ジョンソン J. ヘイスタンド			K. リンドブラード
1982(昭57)	D.グメソン L.キンセル	M.ビジェルケ			
	M.オルソン J.オスボーン				
1983(昭58)	L.ネルソン D.ホック A.カドタ	D. ヒッペン A.グレイマン			
	R. スダディウス				
1984(昭59)	K.シュレクター L.M.シーブ	N.ブラウン D.サガ			
1985(昭60)		L.ダグス			R. ボホヤンパロ
1986(昭61)	L. ソープ E.ボースタット	G.アブラムソン J.ゴネルマン			I. カーレン A. ライティネン M. ビーライネン
1987(昭62)	M. ギブソン Miss C.ジョンソン	L. ベーカー			
		J.バーネット			S. トゥルネン Y. タイバレ
1988(昭63)	N.アルネ K.ディーソン				
1989(昭64)	A. ミルマン N.スタム				M. ヴィルクニエミ
平1)	M.アスバス				
1990(平2)	T.ボルカルト				
	R.ボーマン A.エフレモフ				
	R.バウス K. ヤング				
1991(平3)	E.デューエイ A.マーケル J.ナンス				P. ランタマキ H. カリヤライネン
	K.シューマン A.スレン				
	J.ウインダー				
1992(平4)	D.シェッバック				V. ソヴェリ

注:海外ミッション団体: USS(米国・南部一致シノッド) ULCA(北米一致ルーテル教会) ELCA(米国・福音ルーテル教会)  
AUGUSTANA(米国・オーガスタナ・シノッド) SUOMI(米国・スオミ教会) LEAF(フィンランド福音ルーテル協会)